

日本赤十字看護学会10周年記念

日本赤十字看護学会10年の歩み

10Years Progress of Japanese Red Cross Society of Nursing Science

濱田 悦子 Etsuko Hamada (日本赤十字看護大学)

キーワード：学術集会の変遷、今後の方向性

key words : Changes in Research Topics, Future of the Society

はじめに

本学会は、赤十字の理念に基づき会員相互の研鑽と交流を図り、看護学の発展をめざすことを目的として、2000年5月27日に発足した。少子高齢化の進展、医療の高度化・複雑化、在院日数の短縮化、医療安全に対する国民のニーズの変化等により、医療システム全般を通しての見直しが求められている。それに伴い看護の役割拡大が徐々に始まっている。

初代の理事長の樋口康子氏が、発足を迎えてのご挨拶の中で、「赤十字の理念の根幹は「人道Humanity」にあり、その対象となる人の国籍、民族、宗教、社会的地位などのいかに問わず、また敵味方の区別なく、人間の苦痛と戦い、その人を保護し援助し育むために、自らそこにかけて手を差し伸べる態度にあります。そして赤十字の看護専門職は、国内および国際的な場において、この理念を個々の実践の原理として活動すること、そしてその根拠と方法を学術的にまた体系的に追究する使命を持っています」と力強く宣言されたことが昨日のこのように想起される。

それを受けて、21世紀における赤十字の看護の課題は、人間の生命と健康にアプローチする看護学を構築し、社会の変革に応えられる看護の実践、教育、研究をさらに発展させることが、私どもに残されたものと考えている。

日本赤十字看護学会が発足して10年が経過した今日、設立の趣旨と前述した課題がどのように学会に反映されてきたのか、本稿では、学会誌を中心に「日本赤十字看護学会10年の歩み」を分析し、本学会の特徴と今後の方向性について述べたい。

I. 学術集会の変遷

表1は、過去の学術集会のメインテーマとシンポジウム及びテーマセッションのタイトルを示したものである。メインテーマを紹介すると、第1回から順に、「21世紀の赤十字の看護」、「看護教育－21世紀の叡智を求めて」、「情報化社会と看護」、「変わりゆく医療と赤十字看護の役割」、「国際化時代における赤十字・看護・教育のチャレンジ」、「21世紀の赤十字の看護の方向性を考える」、「いま、求められる赤十字のヒューマンケアと看護実践」、「看護活動と地域社会と協働」、「認知症のひとと家族の暮らしを支える看護を考える」、「語ろう、看護の夢」であった。このメインテーマの変遷を見ると、まさに看護をとりまく激動の時代を推察できるのではなからうか。

さらに、シンポジウムおよびテーマセッションの変遷を示したものが図1である。学術集会に取り上げられたテーマ全体を分類すると、「教育」、「実践」、「国際・災害」、「研究」に大別され、それらに共通した哲学として「赤十字の人道」に依拠していることが考えられる。以下、学会の変遷を通して、大別した項目ごとに詳しく考察したい。

A. 教育

第1回から第3回までは「赤十字の看護教育」というものであった。第4回には「看護実践能力育成のための実習指導」というテーマであり、第5回は「PBL」、「ソーシャルスキルトレーニング」といった教育方法に関するテーマが取り上げられている。第6回、第7回には「大学と臨床の連携」、第8回には「新人看護職員」など、実践にまたがるような継続教育に関するテーマが扱われた。また、「赤十字に関する教育」と

表1. 過去の学術集会のメインテーマとシンポジウム及びテーマセッション

回数	開催年	開催地	メインテーマ	シンポジウム・テーマセッション
第1回	2000年	東京	21世紀の赤十字の看護	シンポジウム：「21世紀の赤十字の教育」 ー私たちの構想と私たちの約束ー テーマセッション：なし
第2回	2001年	東京	看護教育、21世紀の叡智を求めて	シンポジウム：なし 国際救援活動 赤十字看護教育 赤十字の看護実践ーリスクマネジメントー 実践家を育てる臨床看護研究
第3回	2002年	北海道	情報化社会と看護	シンポジウム（Ⅰ）：「ITの看護への応用と問題点」 シンポジウム（Ⅱ）：「赤十字の継続教育」 テーマセッション：なし
第4回	2003年	広島	変わりゆく医療と赤十字看護の役割	シンポジウム：なし 看護職による患者の権利擁護 赤十字の理念と看護管理 看護実践能力育成のための実習指導 高度医療と在宅ケア 人道と国際看護活動 放射線被ばくと看護ーむかしと今ー 実践知を活かすアクションリサーチ
第5回	2004年	東京	国際化時代における赤十字・看護・教育のチャレンジ	救護員としての赤十字看護師のめざすもの シンポジウム：赤十字と災害救援ー人道救援活動のいままで、21世紀の課題ー救護員としての赤十字看護師のめざすもの 難病療養者とともに ーALS患者の療養支援に関する現状と課題ー 実習の場で何が起きているのか 教員ー学生ー患者の三者関係の視点から 看護の教育方略ーPBL・チュートリアルの実際ー ソーシャルスキルトレーニングを看護教育に
第6回	2005年	福岡	21世紀の赤十字看護の方向性を考える	シンポジウム：今改めて問う 赤十字看護とは ネットワークを活かした人材開発と人材育成 大学と臨床の連携のあり方 看護とカウンセリングー緩和医療におけるカウンセリングー 日本赤十字社の災害看護教育のあり方を探る 地域とともにある看護
第7回	2006年	秋田	いま、求められる赤十字のヒューマンケアと看護実践	シンポジウム：赤十字看護への期待 看護と介護の協働 大学と臨床の連携 個人情報管理と看護 赤十字と災害看護
第8回	2007年	愛知	看護活動と地域社会との協働	シンポジウム：いま何故退院支援なのか ー退院後の安心を提供する医療連携の在り方ー 新人看護職員にとって魅力的な職場とは？ 災害時の地域看護活動の構築 ー地域社会との協働を基盤としてー 赤十字病院における施設を越えた専門看護師の効果的な活用 赤十字に関する教育 地域医療連携におけるネットワークの構築 ー大腿骨頸部骨折 地域連携パスを通してー 医療と情報
第9回	2008年	京都	認知症の人と家族の暮らしを支える看護を考える	シンポジウム：認知症の人と家族の暮らしを支える看護を考える 認知症の人・家族と紡ぐケア 専門看護師の導入・定着にむけて ー看護管理者と専門看護師の双方の取り組みー 魅力ある学校づくりー看護専門学校の場合ー 急性期病院における認知症看護認定看護師の活動と課題 看護と情報ー個別化された標準化看護の実現にむけてー
第10回	2009年	東京	語ろう、看護の夢	シンポジウム：看護の夢を支える 助産師の自律と協働 看護の専門性を臨床現場でいかに発揮するか 社会が求める看護の役割拡大ー救急看護認定看護師の活動から

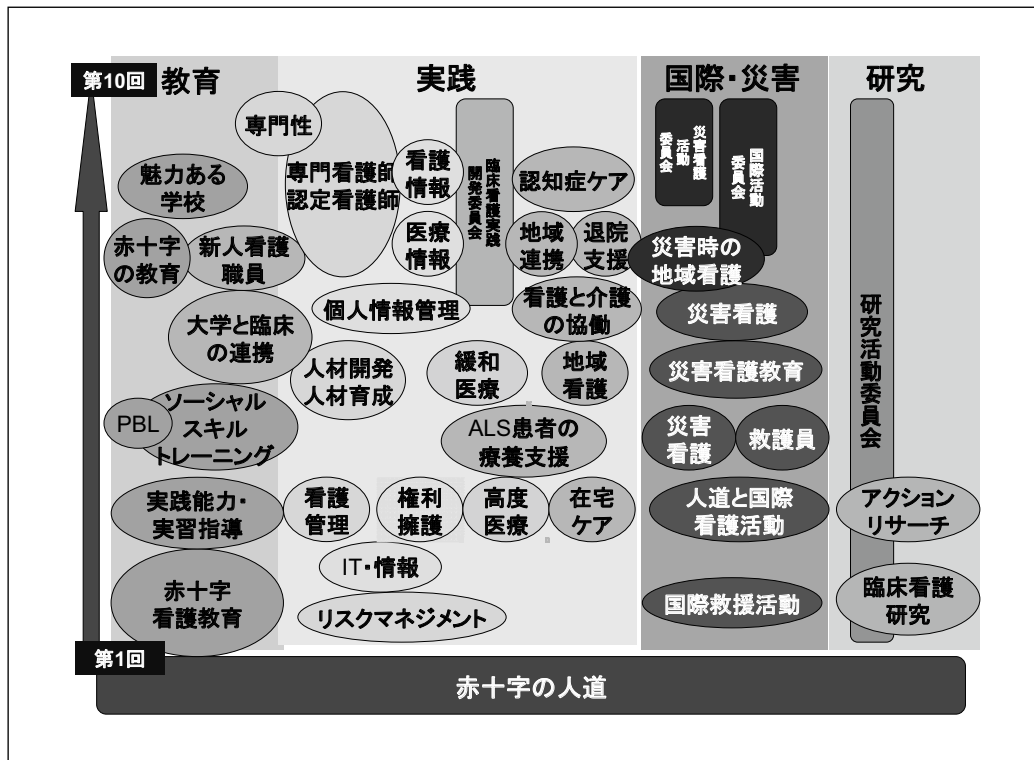


図1. シンポジウムおよびテーマセッションの変遷

いうテーマが再考され、第9回の「魅力ある学校」というテーマにつながっている。赤十字で現在行われている看護教育については述べられているが、赤十字特有のものがあるのだろうか。本学会のテーマからは赤十字の看護教育とは何か、伝統ある看護教育とよく言われるが、その具体的な事象については、なんら言語化されていないことが明らかとなった。

B. 実践

実践については、第2回に「リスクマネジメント」、第3回に「IT・情報」に関するテーマであり、管理的な側面の内容を中心に行っていた。しかし、第4回には、「看護管理」の他に、「権利擁護」、「高度医療」、「在宅ケア」ということで、テーマの幅が広がり、臨床現場で課題となっている内容が扱われている。第5回以降、「ALS患者の療養支援」、「地域看護」(第6回)、「地域連携」(第8回)、「退院支援」(第8回)、「認知症ケア」(第9回)というように、施設内ケアから在宅や地域における看護ケアに看護活動の場が拡大していることが明らかになった。これは、時代のニーズの反映かとも考えられる。

一方、「看護管理」に関する内容としては、第6回の「人材開発・人材育成」というように、キャリアを發展させ、人を育てることを中心の課題としている。そして第8回、第9回では「専門看護師・認定看護師」ということでスペシャリストに関するテーマが扱われた。このテーマは、第10回の学術集会でも、専門職の臨床家を現場でどのように活用するのかという観点から、継続して取り上げられている。さらに、臨床に取

り入れられたIT化に伴い、第7回の「個人情報管理」、第8回の「医療情報」、第9回の「看護情報」といった情報管理に関する内容も臨床現場の課題を反映しているものであろう。

C. 国際・災害

これは、赤十字看護学会の特色ともいえるテーマであり、第2回の「国際救援活動」から始まって、「人道と国際看護活動」(第4回)、「災害看護」(第5～7回)、「救護員」(第5回)などのテーマが継続して扱われている。第8回には「災害時の地域看護活動」ということで、実践の中でもトピックとなっていた地域看護との接点が出てきたのが一つの変化とも考えられる。

D. 研究

第2回に「臨床看護研究」、第3回に「アクションリサーチ」ということで取り上げられているが、その後は主題として登場していない。しかし、学会発足当初から研究活動委員会が、会員の要望による研究のイロハから学びたい意向に沿い、研究方法を別立てにして、研究活動委員会が学会時に行ってきたのも特徴であろう。その内容は、学会員の研究支援を目的にワークショップを中心とした活動であり、量的研究方法、質的研究方法に関して、講演会を開催してきた。

Ⅱ. 本学会の方向性

このように、本学術集会の歩みを概観すると、社会の変化に対応して、テーマ、トピックが変化している

ことがわかる。例えば、赤十字の教育については、時間的経過とともに実践とのつながりを模索する内容へと変化している。しかし赤十字の諸原則がどのように看護の行動化につながるものなのか、具体的に示されていないと思われ、この点が今後の課題であろう。また、国際救援・災害救援については、赤十字の学会として独自性を形成するような活動を展開することが期待できる。

本学会は、時代の変革とともに、学会活動を活性化するために、委員会事業を発足させ、独自の活動の幅を広げてきている。例えば、研究活動委員会は、研究の質の向上を図るために、テーマセッションだけではなく、学会発足中にワークショップを実施するなどし、会員全体の研究に対する支援を行ってきた。

また、平成18年度から「臨床看護実践開発委員会」、平成19年度から「国際活動委員会」、平成20年度から「災害看護活動委員会」といった事業活動が開始となり、学術集会の交流セッションの中で会員との意見交換を行い、赤十字の特徴ともいえる「実践」、「国際・災害」という分野の活動強化を図っている。

おわりに

日本赤十字看護学会の今後の課題として、看護の実践と教育と研究に携わる者が相互に連携し研鑽することを学会活動の中核におき、研究成果の積み重ねをする、すなわち助走から本格的始動への移行の時期ではなかろうか。さらに、赤十字の理念と諸原則が看護実践としてどのように行動化されているのかを検討し、吟味することをしなければ、赤十字の看護教育の発展をみることは困難であろう。

第10回の学術集会のメインテーマでは「語ろう、看護の夢」であったが、参加した会員からは「学会に来て元気になった」、「明日からまた看護をがんばろう」、「忘れていた看護への夢を思い出した」、「看護っていいなと思った」と意見が多く聞かれた。学会に参加することによって、看護についての新しい情報を得るだけでなく、自らの看護実践をリフレクションし明日への看護する活力が得られるような学会になることを夢見ている。